

IIS NEWS

☆講 演☆

☆カップ・ロケット 128J-S の飛翔実験行わる☆

去る9月24日から29日まで秋田県道川海岸でカップ128J-S型ロケット3機の飛しよう実験が行われた。このロケットは国際地球観測年に用いるロケットのメインロケットに当るもので、推進の使用量も従来のベビー型にくらべて格段に大きく、その飛しようぶりはさすがに大人であった。1号機、2号機、3号機とも、その都度発煙は工夫されたが、超音速時の発煙状況は、4キロないし15キロ離れた観測点から光学系追跡を完うするには困難であった。しかしランチングの状況やロケットの飛しよう安定性については予期した成果を取めた。この報告はいずれ本誌に掲載の予定である。

☆カップ・ロケット 128J-T の飛翔実験☆

昭和31年度第2次観測ロケット(カップ128J-T)の飛しよう実験は、来る12月3日から22日の間に第4号機から7号機までの4機の実験を行うことになった。

この実験は、ロケットにテレメータおよびレーダを装備し、同時に光学的観測を併用し、ロケットの飛しよう特性を調べることが目的とし、すでに設営部門を担当する当所の職員が、秋田県道川海岸のロケットセンターに先発し、風速20m、室内温度5°Cという悪条件の中、冬期実験のために必要な諸設備の整備に当たっている。ランチャーロケット班を初め、テレメータ・レーダ班、観測班、計測機班等の研究班や一般業務を担当する総務班も実験前1週間以内には現地に到着、実験に万全を期するための準備が進められる。

なお今回の実験で、ロケットの速度・加速度、温度上昇、機体応力等が電子工学的に計測される。

- ◇助教授 大井光四郎「爆発放散口の設計について」機械学会東京秋期講演大会、東京工大において(1956.10.2)
- ◇助教授 森大吉郎「アナログ・コンピュータによる偏微分方程式の一解法」同 同(同上)
- ◇教授 久保田広「光学工業における最近の問題」機械学会、精機学会連合会、諏訪湖周辺地区講演会特別講演会、岡谷市において(1956.11)
- ◇助教授 丹羽 登、雇 奥野 裕「電子管切換型超音波流速計」電気学会東京支部大会(1956.11.11)
- ◇助教授 安藤良夫「切欠引張り試験における切欠半径の影響」第59期年度造船協会秋期講演会(同上)
- ◇助教授 安藤良夫「静的曲げによる脆性破壊の研究」同上(同上)
- ◇教授 木原 博(工学部)、助教授 安藤良夫「溶接残留応力が脆性破壊におよぼす影響の研究(第1報)」同上(同上)
- ◇助教授 浅原照三「表面活性剤の概念」金属表面技術協会主催 新しいメッキの総合講習会(1956.11.15)
- ◇助教授 鳥飼安生「超音波音源付近の音場(第2報)」音響学会秋季研究発表会 東大理工研において(1956.11.16)

☆寄 稿☆

- ◇助教授 浅原照三、大学院学生 浜田逸郎「ニトロパラフォンとその応用」化学工業 11,971~977(1956)
- ◇助教授 浅原照三「油脂化学工業における最近の進歩」ケミカルニュース, 11, 16~20(1956)

IIS NEWS

筆 者 紹 介

- ◇森脇義雄 教授 工博 専攻 電気回路学・超短波工学
- ◇河村達雄 大学院学生 専攻 同上
- ◇丹羽 登 助教授・工博 専攻 通信機器学・超音波
- ◇奥野 裕 雇 員 専攻 同上 応用

- ◇李 燦熙 臨時筆生 専攻 真空工学
- ◇富永五郎 助教授 専攻 物理機器学
- ◇森 政弘 助手 専攻 自動制御
- ◇松永正久 助教授 専攻 精密加工学・電子顕微鏡・電子廻折
- ◇鳥飼安生 助教授 理博 専攻 音響工学

編 集 委 員

- 編集委員長 岡 宗 次 郎
- 編集委員 *岡 本 舜 三
- 鳥 飼 安 生
- 高 橋 安 人

編 集 委 員

- 安 藤 良 夫
- 水 町 長 生
- 藤 高 周 平
- *野 村 民 也
- 加 藤 正 夫

編 集 委 員

- 武 藤 義 一
- 山 辺 武 郎
- 久 保 慶 三 郎
- 勝 田 高 司

専 門 委 員

- 星 野 昌 一
- 編 集 幹 事 下 村 潤 二 朗
- 編 集 室 水 野 晴 明

(* 印当番委員)

第 8 卷 第 11 号

生 産 研 究

(本誌は生産技術研究所の研究報
介誌として、毎月1回発行する)

1956年11月1日 発行

編 集 者 岡 宗 次 郎

印 刷 者

三美印刷株式会社
東京都千代田区神田多町2の7

発 行 者 星 合 正 治

発 行 所

東京大学生産技術研究所
千葉市弥生町1
電話千葉366-370